都倫研　読書会
２０１６（平成２８）年８月２２日（月）

場所　東京都立小山台高等学校　会議室
（東急目黒線武蔵小山駅前）

「荘子」

「荘子」は、「老子」と並び、中国の道家思想を伝える重要な古典である。孔子・孟子と続く儒家が、中国の正当な思想として、社会や政治の中で陽の当たる場所を歩み続けてきたのに対して、「老荘」の思想は、その裏側で、個人の生き方を支えていくものとして、存在感を発揮してきた。

後世では、「老荘」と、一括されることが多い、「老子」・「荘子」であるが、書物としての「老子」と「荘子」の内容は、かなり異なっている。現行の「老子」は、固有の人名が出てくることはなく、抽象的なことがほとんどであるのに対して、「荘子」は、寓話に満ち満ちている。また、「老子」には、まだ。社会・国家への関心があるのに対して、「荘子」は、そのような現実に関心を持たずに、絶対的な自由の境地を志向している。

「老子」については、最近の「郭店楚簡」・「馬王堆帛書甲本」・「馬王堆帛書乙本」の発見により、今までの河上公注・王弼注の本に依拠してきた研究への根本的な再検討が始まり、未だ定説が存在していない段階であると言われている。

それに対して、現存の「荘子」は、全て、西晋の郭象によって定められたものである。内篇七篇、外篇十七篇、雑篇十一篇の全三十三篇である。現在の通説では、その中で、内篇が、荘子自身が書いたものであり、外篇・雑篇は、荘子学派が付け加えたものであるということになっている。（当然、それに対する異論もある。）特に、内篇の中でも、逍遙遊篇第一と斉物論篇第二が、荘子自身の思想をよく伝えていると言われている。そこで、この二篇を中心に読んでいきたい。

現在、手に入りやすいテキストとして以下のものがあげられる。

１、講談社学術文庫「荘子内篇」福永光司訳。（旧版は朝日新聞社）
２、講談社学術文庫「荘子全訳注上・下」池田知久訳・解説
３、岩波文庫「荘子」全四巻、金谷治訳。
４、ちくま学芸文庫「荘子」全三巻、福永光司・興善宏訳。
５、中公クラッシクス「荘子」Ⅰ・Ⅱ、森三樹三郎訳。（旧版は中公文庫）
６、明治書院、新釈漢文大系「老子・荘子」上下巻、市川安司・遠藤哲夫訳・注解

今回のテキストとしては、菅野先生のお勧めもあり、１を使用したい。その他のテキストでもかまわないが、５は、原文が掲載されていないので不便である。